

斑浮腫に対する Bevacizumab 硝子体注入の治療効果. 第 46 回網膜硝子体学会総会, 青森, 11 月.

- 20) 宮崎かづき, 柏田てい子, 林 孝彰, 北川貴明, 久保朗子, 浦島充佳, 北原健二, 常岡 寛. 1 型 3 色覚および 2 型 3 色覚における Lanthony desaturated panel D-15 test の意義. 第 48 回日本視能矯正学会, 東京, 11 月. [日視能矯正会プログラム抄集 2007; 48: 61]

#### IV. 著 書

- 1) 常岡 寛. 処置一麻酔. 眼科診療便利手帖. 改訂 2 版. 東京: 診断と治療社, 2007. p. 322-3.
- 2) Tsuneoka H. Implantation of a New HOYA-IOL, Y-60H, through a 1.7 mm Corneal Incision. In: Garg A, et al. Mastering the Techniques of Advanced Phaco Surgery. New Delhi: Jaypee Brothers, 2008. p. 209-13.
- 3) Tsuneoka H. Minimally Invasive “In-the-bag” Bimanual Phaco. In: Garg A, et al, editors. Mastering the Techniques of Advanced Phaco Surgery. New Delhi: Jaypee Brothers, 2008. p. 203-8.
- 4) 敷島敬悟. 13. 瞳孔疾患 視蓋瞳孔. 田野保雄, 樋田哲夫総編集. 今日の眼疾患治療指針. 第 2 版. 東京: 医学書院, 2007. p. 418.
- 5) 敷島敬悟. 13. 瞳孔疾患 瞳孔不同 (鑑別疾患). 田野保雄, 樋田哲夫総編集. 今日の眼疾患治療指針. 第 2 版. 東京: 医学書院, 2007. p. 418-20.

#### V. その他

- 1) 常岡 寛. 白内障を予防. サンケイスポーツ. 2007.
- 2) 常岡 寛. 新任教授からの一言ー慈恵医大眼科をよろしく願い致します. 東京都眼科医会報 2007; 200: 12-3.
- 3) 常岡 寛. 白内障・緑内障 防ぐ, 治す!ー白内障の手術はここまで進歩した! 切開創はわずか 2 mm, 日帰り手術も可能. 健康 2007; 32(12): 78-9.
- 4) 常岡 寛. 最近の白内障手術. 港区医師会報 2008; 115: 91.
- 5) 酒井 勉. 内眼炎の新しい診断と治療. 田辺三菱製薬株式会社講演会. 東京, 12 月.

### 耳鼻咽喉科学講座

教 授: 森山 寛	中耳疾患の病態とその手術的治療, 副鼻腔疾患の病態および内視鏡下鼻内手術の開発
教 授: 梅澤 祐二	中耳真珠腫の病態・中耳伝音系の手術的再建
教 授: 加藤 孝邦	頭頸部腫瘍・頭頸部再建外科・画像診断
准教授: 波多野 篤	頭頸部腫瘍の画像診断・手術療法
准教授: 小島 博己	中耳疾患の病態とその手術的治療, 頭頸部腫瘍の基礎的研究
准教授: 鴻 信義	鼻・副鼻腔疾患の病態と手術的治療
講 師: 富谷 義徳	感染症の研究
講 師: 添田 一弘	身体動揺・平衡機能障害の基礎的・臨床的研究
講 師: 飯田 誠	アレルギー疾患の基礎的研究, 鼻・副鼻腔疾患の病態と手術的治療
講 師: 田中 康広	中耳疾患の病態と手術治療, 中耳真珠腫の基礎的研究
講 師: 吉川 衛	鼻アレルギーおよび副鼻腔炎の病態における遺伝子発現制御機構の解析, 鼻・副鼻腔疾患の手術的治療
講 師: 飯田 実	音声障害の診断・治療, 嚥下障害の診断・治療
講 師: 松脇 由典	鼻・副鼻腔疾患の病態と手術的治療, 好酸球性炎症の基礎的研究

### 教育・研究概要

#### I. 耳科領域

中耳粘膜再生の基礎的実験と臨床応用に向けての実験をはじめとして, 真珠腫遺残上皮を標的とした遺伝子治療の研究, 安全な手術を行うことを目的としたバーチャルリアリティ技術を用いたナビゲーションシステムの開発を行っている。また当院で行った真珠腫手術についてのデータはデータベースに記録され, 手術例の病態分析, 術式の検討, 疫学調査, 術後成績などの検討を行っている。難聴担

当では代謝異常疾患の内耳生理について実験動物を用いた研究を行っており、難聴患者の遺伝子解析を信州大との共同研究で行っている。

中耳手術は年間およそ 200 例が行われている。人工内耳手術も年間数例行われ、良好な成績をおさめている。さらに錐体部真珠腫などの病変に対しての頭蓋底手術も脳神経外科との協力のもとに行っており、聴力および顔面神経機能を保存できる症例が増加している。くわえて聴神経腫瘍手術も開始し、経後頭蓋窩法、経中頭蓋窩法、経迷路法のアプローチを症例に応じて使い分けて行っている。

中耳炎および難聴外来では現在 8 人の参加のもと、毎週月曜日午後専門外来を設け、術後患者の診察、経過観察およびデーターの管理を主に行っている。患者数も最近は毎週 60 人を越えている。滲出性中耳炎外来は毎週火曜日午後に行われ、個々の乳突蜂巣の発育程度に応じて治療法の選択を行っている。またチューブ留置期間に関しては経粘膜的なガス交換に伴う中耳腔全圧の変化を測定し、個々の症例に応じたチューブ抜去時期の決定を行っている。

神経耳科領域の研究面ではフォースプレートを用いた動的解析装置と解析ソフトを用いた指先の接触圧と姿勢制御の関係を検証する実験結果につき解析を行っている。臨床的には、メニエール病、急性低音障害型感音難聴に関して、その背景因子であるとされるストレスや心因的な要因について心理テスト等を用い引き続き解析中であり、治療の中で役立っている。また BPPV に対しては赤外線 CCD カメラによる眼振検査や ENG により、原因である患側の半規管の同定を行うとともに理学療法を施行している。

## II. 鼻科領域

鼻副鼻腔炎に対する内視鏡下鼻内手術 (ESS: Endoscopic Sinus Surgery) の症例および術後経過に関する前向きな臨床研究を行った。また副鼻腔、髄膜瘤、髄液漏、下垂体疾患などの頭蓋底疾患に対する内視鏡下の鼻内的アプローチによる治療を重ね、低侵襲性手術の利点・欠点について検討を行っている。ESS の拡大適応と安全性の向上を目指し、立体内視鏡画像とステレオナビゲーションとを重畳表示させるハイテクシステムを開発し実際に手術を施行した。現在、機械の精度や性能を改造中である。

難治性である好酸球性副鼻腔炎病態に対する真菌の関与を検討している。*Alternaria* は副鼻腔炎患者の分離末梢血単核球に対し有意に IL-5, IL-13, IFN $\gamma$  の産生を誘導するが、正常者に対してはこれ

らの反応は認められなかった。*Alternaria* はまたヒト分離好酸球に対しても活性化および脱顆粒を直接誘導することを証明した。さらに *Alternaria* が分泌する Aspartate protease が好酸球、気道上皮細胞表面に発現する Protease-Activated Receptor-2 を介して種々の免疫反応が惹起されていることを明らかにした。またブドウ球菌スーパー抗原の関与に関する研究も同時に進めている。鼻アレルギーの病態形成因子の解明を目的として、通年性アレルギー性鼻炎症例と正常例の下鼻甲介から培養した線維芽細胞を包括的に遺伝子発現解析することによって、細胞の表現型と臨床病型の関連を比較検討したところ、多くの遺伝子発現のパターンがアレルギーの有無によって異なっていた。

## III. 頭頸部腫瘍領域

現在の頭頸部癌治療の主体としては、①手術 ②RT (放射線治療) ③CRT (放射線科学療法併用療法) ④超選択的動注化学療法による放射線併用療法がある。当院における治療の基本方針として、各々の症例のがん局在部位、病期、根治切除の可否、合併症の有無、PS (performance status)、年齢、社会的・家族的背景等、これらの要因を考慮した上で治療を選択し実践している。

①手術においては、機能温存を最大限に考慮し根治切除術を行うために、進行がん症例に対して遊離皮弁 (腹直筋皮弁、遊離空腸皮弁、前腕皮弁、前外側大腿皮弁等) を用いた再建手術を施行している (年間約 50~60 例)。再建手術以外では、喉頭がん症例に対しては、RT 後の再発症例・T2~T3 症例等に対し喉頭部分切除を行い可能な限りの喉頭温存に努めている。

②RT は主に早期がん症例に対して外来通院で行っている。場合により、経口抗がん剤 TS-1 内服による CRT 治療も行っている。また進行がん症例術後には、術後の補助療法として RT 治療を行っている。

③CRT は、放射線治療施行と同時に chemotherapy として CDDP, 5-FU の投与を行い、その後 Adjuvant chemotherapy を行っている。その対象としては中、下咽頭がん、頸部食道がんにおける喉頭温存不可症例および根治切除が不可能な症例に対し行っている。現在のところ、比較的良好な奏功率を得ているが、治療成績については現在検討中である。また最近では、進行がん症例の術後の補助療法としても行っており、生存率上昇への寄与の有無については検討中である。今後の課題として、経口抗がん

ん剤 TS-1 と CDDP の組み合わせによる CRT 治療や、現在海外での治験が行われている CDDP, 5-FU に TXT を加えた 3 剤併用の CRT 治療の導入について検討していく予定である。また新たな CRT 治療として分子標的薬の導入も将来的には検討課題である。

④ 超選択的動注科学療法による放射線併用療法は、根治切除不能症例の中で特に極度の進行がん症例に対し有効となりうる治療手段の一つであるが、今後当院においても導入を検討中である。

更に頭頸部癌の生存率向上に寄与する要因の一つとして、がんの早期診断が重要である。現在、NBI 内視鏡 (narrow band imaging: 狭帯域フィルター内視鏡) を用い、表在性中・下咽頭がんの早期発見に努めている。

#### IV. 音声・嚥下機能に関する研究

##### 1. 音声外科手術

声帯ポリープ・声帯結節・声帯嚢胞などに対して、適応を的確に判断し、フレキシブルファイバースコープ下の外来日帰り手術と全身麻酔下ラリಂಗマイクロスージャリー (LMS: Laryngomicrosurgery) を行っている。LMS においては最新のマイクロフラップ法を導入している。術前・術後の音響分析・空気力学的検査・アンケートなどの評価の比較を行うことにより、より厳密な手術適応の判断が出来るよう検討を行う。

片側性反回神経麻痺に対しては、長年アテロコラーゲン注入術による外来日帰り手術を行ってきたことにより、その限界が見えてきたため、必要と考えられる症例には喉頭枠組み手術を積極的に行っていく。

##### 2. 痙攣性発声障害の診断と治療

痙攣性発声障害に対する第 1 選択の治療であるボツリヌス治療を 2004 年 12 月から大学倫理委員会の承認のもと行っている。症例は増加傾向にあり、診断・治療に関する臨床的検討をすすめるとともに、ボツリヌス治療無効例に対する外科的治療も今後の課題である。

##### 3. 嚥下障害の評価と治療

嚥下障害の評価と治療には神経内科やリハ科など他科との連携、および看護師をはじめとする co medical とのチームワークが重要である。VE および VF 検査などをもとに症例の評価を行い、治療方針を検討し嚥下訓練をすすめている。

#### V. 睡眠時無呼吸症候群に関する研究

睡眠障害はメタボリックシンドロームをはじめとする身体疾患との関連が注目されている。また、小児では「キレる子供」など感情をふくめた脳機能の発達に影響を与えることが注目されている。

現在、我々が注目し取り組んでいるのは

- 鼻呼吸と睡眠の安定性
- アレルギー性鼻炎 (花粉症) の睡眠障害
- 小児の OSAS における ADHD 様症状
- 小児の OSAS における身体発育
- アデノイド顔貌における顎顔面発育と睡眠呼吸障害

- 成人 OSAS に対する新しい外科治療

などである。CPAP 治療が一般的となり、一般の耳鼻咽喉科医は SAS の治療から一歩ひいている印象をもつが、正常な鼻呼吸と正常な睡眠の重要性を啓蒙できるのは耳鼻咽喉科医だけである。多くの先生の睡眠医療への参加を歓迎する。

##### 「点検・評価」

耳科領域においては慢性中耳炎、中耳真珠腫、耳小骨奇形や耳硬化症などの中耳疾患、側頭骨錐体尖部病変、頭蓋底病変、内耳道病変などに対する手術手技や成績の評価を行った。基礎面では中耳粘膜再生の研究 (動物実験)、遺残真珠腫上皮の自然消滅を目指した遺伝子治療など基礎的実験を行い、良好な成績をおさめた。国内外の学会におけるシンポやパネルへの参加要請も多く、また各種講演会の講演依頼も増えている。さらに両側高度難聴者に対する人工内耳植え込み術は順調に推移し、現在まで再手術例を含めて 17 例を経験した。また第 23 回耳手術研修会を開催し全国の大学や基幹病院から集まった 20 名の医師の研修を行った。

鼻科領域については当教室で開発した内視鏡下鼻内副鼻腔手術 (ESS: Endoscopic Sinus Surgery) の術式の適応拡大を行い、炎症以外の眼窩壁骨折、鼻・副鼻腔腫瘍、髄液漏や下垂体疾患など頭蓋底疾患も対象としている。今後の Skull base navigation surgery への展開が容易になった。基礎的研究では難治化 (好酸球性副鼻腔炎) の要因としてのブドウ球菌スーパー抗原や真菌に関し検討した。またアレルギー分野では鼻内線維芽細胞の包括的な遺伝子解析を行い遺伝子発現のパターンの違いが認識された。対外的評価として、海外 (国際学会) から講演要請 (パネル、シンポ) が多く寄せられて年々増加している。ESS の研修のため、全国から医師 32 名の参加のもと手術研修会を開催した (2007 年で第 15 回を数

える)。また韓国の医師のための ESS 研修会も 2007 年で第 11 回目が開催され 15 名の参加があった。両研修会に於ける Live surgery が好評であった。

頭頸部腫瘍領域では機能温存を最大限に考慮した根治的な治療を行っている。一つは遊離皮弁を用いた再建手術であり、他方は化学療法同時併用放射線療法である。外来での治療が可能な経口抗がん剤の TS-1 内服と放射線療法併用を中心とした複合的な外来ベースの化学療法を試み、患者の QOL を上げる努力をしている。咽頭癌の早期発見のため NBI 内視鏡を用い、表在性の中・下咽頭癌の早期発見を行っている。

喉頭・音声領域では日帰り手術としてフレキシブルファイバー下の喉頭疾患治療の確立を目指している。また痙攣性発声障害に対するボツリヌス toxin 注射例も症例が積み上げられも良好な症状改善が確認されている。睡眠時無呼吸においては精神神経科、呼吸器外科、歯科などと総合的な診断と治療を行うため、専門外来と PSG のための専用ベッド(2 床)が稼働している。とくに小児の睡眠障害の検討が進んだ。

文部省科研費も基盤研究、若手研究と計 8 題が交付を受けた。

## 研究業績

### I. 原著論文

- 1) 小島博己, 田中康広, 宮崎日出海, 谷口雄一郎, 村上信五, 森山 寛. 錐体部真珠腫の臨床像について 当科における術式および治療成績の検討. 日耳鼻会報 2008; 111(2): 50-7.
- 2) 福家智仁 (山田日赤), 伊藤裕之 (神リハ), 加藤孝邦, 山田弘之 (山田日赤). 進行性神経疾患における誤嚥防止術と介護者の QOL. 日気食会報 2007; 58(4): 371-376.
- 3) 千葉伸太郎. 小児の睡眠呼吸障害の特徴に関する研究 睡眠呼吸障害からみたアデノイド顔貌. 耳鼻展望 2007; 50(3): 142-56.
- 4) 千葉伸太郎. Cyclic alternating pattern (CAP) による睡眠評価をおこなった小児閉塞性睡眠時無呼吸の 1 例. 不眠研究 2007; 33-5.
- 5) 千葉伸太郎, 遠藤 誠, 森脇宏人, 内田 亮, 森山 寛, 望月太一, 木下 陽. GERD 睡眠呼吸障害患者における胃食道逆流症 (GERD) と QOL に関する検討. 日気管食道会報 2007; 58(2): 189-90.
- 6) Harada M, Nakashima K, Hirota T, Shimizu M, Doi S, Fujita K, Shirakawa T, Enomoto T, Yoshikawa M, Moriyama H, Matsumoto K, Saito H, Suzuki Y, Nakamura Y, Tamari M. Functional

polymorphism in the suppressor of cytokine signaling 1 gene associated with adult asthma. Am J Respir Cell Mol Biol 2007; 36(4): 491-96.

- 7) 松脇由典, 浅香大也, 大櫛哲史, 吉田拓人, 鴻 信義, 森山 寛. 好酸球性副鼻腔炎の疫学, 病態, 治療. 日鼻科会誌 2007; 46(1): 42-3.
- 8) Yaguchi Y, Wada K, Uchimizu H, Tanaka Y, Kojima H, Moriyama H. Middle ear mucosa regeneration by grafting of artificial mucosa. Acta Otolaryngol 2007; 127(10): 1038-44.
- 9) Uchimizu H. Effects of inflammatory changes in the middle ear mucosa on middle ear total pressure. Acta Otolaryngol 2007; 127(10): 1031-7.
- 10) 高柳博久, 小森 学, 中山次久, 米本友明, 部坂弘彦, 森山 寛. 特発性縦隔気腫 6 症例の検討. 日気管食道会報 2007; 58(6): 574-81.
- 11) 高柳博久, 小森 学, 中山次久, 米本友明. 当院 (急性期病院) における嚥下障害の取り組み. 耳鼻展望 2008; 51(1): 62-5.
- 12) 飯村慈朗, 蒲 信泰, 平林秀樹, 春名眞一. 視器障害を伴う後部副鼻腔嚢胞の臨床的検討. 耳鼻展望 2007; 50(6): 410-5.
- 13) 吉村 剛, 野原 修, 大森剛哉, 宇井直也, 葉山貴司, 小島純也, 石井彩子, 永倉仁史, 小澤 仁, 今井透, 遠藤朝彦. 花粉飛散量による特異的 IgE 値の変動スギ特異的減感作療法施行症例における検討. 耳鼻展望 2007; 50(3): 157-63.
- 14) 吉村 剛, 吉川 衛, 鴻 信義, 春名眞一, 森山 寛. 喘息を合併する慢性副鼻腔炎におけるロイコトリエンの関与について. 耳鼻展望 2008; 51(1): 26-32.
- 15) 小林俊樹, 平澤良征, 宇田川友克, 歌橋弘哉, 飯田 誠. 喉頭浮腫を合併したムンプス感染症の 1 症例. 耳鼻展望 2008; 58(1): 49-51.

### II. 総 説

- 1) 森山 寛. 診断の指針 治療の指針 中耳真珠腫症病態と治療. 総合臨 2007; 56(8): 2551-2.
- 2) 森山 寛. 副鼻腔炎の手術適応について. クリニシアン 2007; 54(7): 779-81.
- 3) 森山 寛, 小島博己. 先天性真珠腫の病態と手術的治療. 都医雑誌 2007; 60(4): 51-5.
- 4) 今井 透. 病診・診診連携 花粉症情報提供における病診連携. 鼻アレルギーフロンティア 2007; 7(2): 52-6.
- 5) 中島庸也 (東京歯科大学). 【口腔内病変をどう診るか】 口腔の診断に必要なこと 視触診のポイント. JOHNS 2007; 23(12): 1753-5.
- 6) 柳 清. 【鼻副鼻腔手術を極める】 内視鏡下鼻副鼻腔手術における留意点とコツ 眼窩壁骨折.

- JOHNS 2008; 24(2): 239-43.
- 7) 小島博己, 【私が診断・治療に苦慮した中耳炎】 癒着性中耳炎の手術と長期成績, ENTONI 2007; 76: 45-50.
  - 8) 鴻 信義, 小児副鼻腔炎に対する手術療法の適応と問題点, 日鼻科会誌 2007; 46(1): 73-4.
  - 9) 鴻 信義, 【鼻副鼻腔手術を極める】内視鏡下鼻副鼻腔手術における留意点とコツ 副鼻腔炎における前頭洞へのアプローチ, JOHNS 2008; 24(2): 193-6.
  - 10) 松脇由典, 内水浩貴, 森山 寛, 【好酸球増多性疾患】好酸球性中耳炎・副鼻腔炎の病態と治療, アレルギーの臨 2007; 27(9): 688-92.

### III. 学会発表

- 1) Moriyama H. Surgery for attic and stapes tympanosclerosis. 26th Politzer Society Meeting. Cleveland, Oct.
- 2) Moriyama H. Appropriate standard for surgery of pars flaccida cholesteatoma. 9th Japan-Taiwan conference in Otolaryngology, Head and Neck Surgery. Sendai, Nov.
- 3) Moriyama H. Nasal endoscopy: Applications and limitations. How and when to use in office and emergency room? 12th International Rhinologic Society. Venecia, Dec.
- 4) 森山 寛, 耳鼻咽喉科医の育成を目指して, 第108回日本耳鼻咽喉科学会, 金沢, 5月, [日耳鼻会報 2007; 110(4): 205]
- 5) 森山 寛, 医事紛争の現状と防止策 病院において, 第21回日耳鼻専門医講習会, 名古屋, 11月.
- 6) 加藤孝邦, 頭頸部癌の治療—下咽頭癌治療—, 第50回日本形成外科学会総会, 東京, 4月.
- 7) Ito H (Kanagawa Rehabilitation Hospital). Treatment of dysphagia due to medullary lesion Treatment of dysphagia. 4th International Society of Physical and Rehabilitation Medicine. Seoul, June.
- 8) 伊藤裕之 (神奈川リハビリテーション病院), 加藤孝邦, 嚥下運動の pattern generator と嚥下障害の機能訓練, 第31回日本嚥下医学会, 横浜, 2月.
- 9) 波多野篤, 濱 孝憲, 飯野 孝, 清野洋一, 齋藤孝夫, 加藤孝邦, 森山 寛, 腫瘍の局在と頭蓋底との関係から見た鼻腔・篩骨洞悪性腫瘍に対する手術術式の検討, 第31回頭頸部癌学会, 横浜, 6月, [頭頸部癌 2007; 33(2): 172]
- 10) 波多野篤, 中嶋真人, 鴻 信義, 加藤孝邦, 頭蓋底近傍の鼻副鼻腔悪性腫瘍切除における内視鏡使用の有用性, 第19回日本頭蓋底外科学会, 東京, 7月, [日本頭蓋底外科学会誌
- 11) Kojima H. (Panel discussion) Cochlear implantation in patients with chronic otitis media. Management of severe neurosensory hearing loss. 3rd Consensus on Auditory Implants. Marseille, June.
- 12) 小島博己, 田中康広, 谷口雄一郎, 山本和久, 宮崎日出海, 村上信五, 森山 寛, 摘出困難部位に対する真珠腫手術, 第17回日本耳科学会, 博多, 10月.
- 13) Otori N. Endoscopic sinus surgery for inverted papilloma. Asia Pacific Rhinology Forum on Advanced FESS and Endoscopic Skull Base Surgery. Hong Kong, July.
- 14) 千葉伸太郎, (臨床セミナー 4) いびき, 無呼吸の手術治療—手術適応とそのコツ—, 第108回日本耳鼻咽喉科学会, 金沢, 5月.
- 15) 田中康広, 志和成紀, 山本和央, 谷口雄一郎, 小島博己, 森山 寛, 当科における鼓室形成術 IV 型の術後聴力成績, 第17回日本耳科学会, 福岡, 10月.
- 16) Yoshikawa M, Wada K, Yoshimura T, Okada N<sup>1)</sup>, Saito H<sup>1)</sup> (National Research Institute for Child Health and Development), Moriyama H. Identification of interferon-inducible gene expression in fibroblasts derived from allergic and nonallergic patients. World Allergy Congress 2007. Bangkok, Dec.
- 17) 宮崎日出海, 中富浩文 (虎ノ門病院), 森山 寛, 聴神経腫瘍に対する Minimally Invasive Retrosigmoid Approach—Tear drop Euro coin bur hole technique—, 第17回日本耳科学会総会, 福岡, 10月, [Otol Jpn 2007; 17(4): 503]
- 18) Matsuwaki Y, Inoue Y, White TA, Ponikau JU, Moriyama H, Kita H. Alternaria stimulates activation of eosinophils through PAR2. Annual Meeting of the American Academy of Otolaryngology-Head and Neck Surgery Foundation. Washington D.C, Sept. [Otolaryngol Head Neck Surg 2007; 137; 201]
- 19) Iida M, Woo P<sup>1)</sup>, Ivey CM<sup>1)</sup> (Mount Sinai Hospital). Superior thyroid cornu syndrome: an unusual cause of cervical dysphagia. 87th ABEA (American Broncho-Esophagological Association) Annual Meeting. San Diego, Apr.
- 20) Yoshida T, Matsuwaki Y, Asaka D, Moriyama H. The role of protease-activated receptors (pars) in chronic rhinosinusitis (crs). American Academy of Allergy Asthma & Immunology 2008 Annual Meeting. Philadelphia, Mar. [J Allergy Clin Immunol 2008; 121(2): 73]

## IV. 著 書

- 1) 飯田 誠, 鼻の病気がわかる本, 東京: 法研, 2007.
- 2) 小島博己, 中耳炎, 病気と薬パーフェクト BOOK 2008(薬局 2008年3月増刊号), 東京: 南山堂, 2008. p. 1235-7.
- 3) 吉川 衛, DNA チップによる遺伝子発現解析, 森山 寛, 岸本誠司, 小林俊光, 川内秀之, 今日の耳鼻咽喉科・頭頸部外科治療指針, 第3版, 東京: 医学書院, 2008. p. 609-10.

## V. その他

- 1) 加藤孝邦, 鼻の画像診断解析, 九州大学院医学研究院耳鼻咽喉科学教室学術講演会, 博多, 7月.
- 2) 加藤孝邦, NBI 内視鏡と耳鼻咽喉科疾患, 第16回中央ブロック ENT カンファレンス東京, 東京, 10月.
- 3) 加藤孝邦, 喉頭機能保存を目指した下咽頭癌の診断と治療—NBI 内視鏡と手術を中心に—, 第3回栃木頭頸部癌カンファレンス, 宇都宮, 11月.
- 4) 齋藤孝夫, 耳下腺腫瘍の診断と治療, 東京都耳鼻咽喉科医会学術講演会, 東京, 1月.
- 5) 宮崎日出海, 中耳・内耳手術に対応した術中三次元ナビゲーションシステムの開発, 第453回慈大耳鼻科会総会, 東京, 4月.

## 麻 酔 科 学 講 座

教 授:	上園 晶一	小児麻酔, 心臓血管外科麻酔, 肺高血圧の診断と治療
教授(外):	根津 武彦	集中治療
准教授:	近江 禎子	局所麻酔
准教授:	瀧浪 將典	安全管理, 術中モニター
講 師:	北原 雅樹	疼痛管理
講 師:	藤原千江子	呼吸モニター
講 師:	近藤 一郎	脊髄における疼痛機序
講 師:	三尾 寧	循環器, 麻酔薬の臓器保護作用
講 師:	庄司 和広	術後疼痛管理
准教授(派):	上出 正之	臨床麻酔
准教授(派):	小山 直四	臨床麻酔

## 教育・研究概要

## I. 臨床麻酔領域の研究

## (1) 小児麻酔アウトカム研究

小顎症の代表的疾患である Hemifacial Microsomia (HFM) は挿管困難症を伴うことが多い。HFM の一部は, 神経堤細胞の異常が原因と考えられており, 実際, HFM の患者で先天性心疾患を伴う場合, その先天性心疾患は神経堤細胞欠損が原因でおこる心疾患に限られている。小児症患者(HFM の一種と考えられる)を対象に調査したところ, 先天性心疾患の罹患率は5%程度であり, 神経堤細胞由来の構造(例えばファロー四徴症など)に異常を持つ疾患だけであった。これらの患者の遺伝子研究は, 神経堤細胞の発生・分化に関する情報を提供できる可能性がある。

## (2) 新たな輸液指標に関する研究

パルスオキシメータのプレシスモグラフ波形振幅の呼吸性変動を測定する脈波変動指標(PVI: Radical 7™, Masimo)は, 輸液管理の非侵襲的な指標として有用である可能性があることが近年示唆されている。PVI と, 輸液管理の指標として有用であるとされている一回拍出量変動(SVV: FloTrac CO monitor™, Edwards)および従来一般的に輸液管理の指標とされてきた中心静脈圧(CVP)を測定, 比較して, より低侵襲に安全な術中輸液管理が行えるかを検討した。